様式 C-7-2

自己評価報告書

平成 22 年　5 月　19 日現在

研究種目：若手研究(B)
研究期間：2007 ～ 2010
課題番号： 19730446
研究課題名（和文）回想法は高齢者の認知症予防および心理的ｗｅｌｌ－ｂｅｉｎｇの改善に有効か
研究課題名（英文）Effect of Reminiscence Therapy on prevention of dementia for older adults

研究代表者
野村信威（NOMURA NOBUTAKE）
明治学院大学　心理学部心理学科　講師
研究者番号：90411719

研究分野：
科研費の分科・細目：
キーワード：

１．研究計画の概要

本研究の目的は，グループ回想法が高齢者の認知症予防および心理的 well-being の改善に有効かどうかを検討することである。また，どのように過去を回想することがより有効であるのかを検討することである。

そして，１グループ回想法による介入研究の実施，２質問紙調査による縦断研究，３語られた逐語記録に対する内容分析という３つの研究アプローチを通して，グループ回想法が高齢者の認知症予防および心理的 well-being の改善に有効であるかを検討することである。

２．研究の進捗状況

上記の研究アプローチのうち，1 グループ回想法による介入研究の実施については，当初予定していた協力機関において条件を満たす充分な参加者数を確保出来なかった。また代表研究者の所属の異動により，新たな協力機関を確保する必要があり，現在検討中である。

２質問紙調査による縦断研究についてはデータの収集および分析を終了し，その研究成果を国内および国際学会で発表した。今後は研究成果の論文投稿を行う。

そして３逐語記録に対する内容分析は，介入研究でのデータ収集が未完了であるため，現時点では進展していない。介入研究の今後の進捗状況を鑑み，研究計画の見直しを検討する必要がある。

３．現在までの達成度

③やや遅れている。

（理由）

当初の計画を充分達成出来ておらず，遅れが見られる。その理由として，介入研究における研究対象者数が充分ではないこと，新たな対象者の確保の見通しが現時点で立っていないことがある。あわせて内容分析については計画の見直しを行う可能性がある。その一方で，質問紙を用いた縦断研究はほぼ完了しており，一定の成果が認められたと言える。

４．今後の研究の推進方策

介入研究については，あらたな協力機関を確保した上でさらなる研究参加者を確保するか，あるいは当初の研究計画（特に認知症の予防効果に対する実証的検討について）の部分的な見直しを行い，少数事例に対する認知症の予防効果の検討に目的を修正する。その上でこれまでの研究成果をまとめる。

５．　代表的な研究成果

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計０件）

〔学会発表〕（計４件）

<u>野村 信威</u>　高齢者における回想の質と適応との関連について(15)　グループ回想法の効果評価における個別的検討の意義　日本心理学会第 72 回大会　2008 年 9 月 19-21 日　北海道大学

<u>野村 信威</u>　高齢者における回想の質と適応との関連について(16)　回想法は施設入居高齢者の認知症予防に有効か　日本心理学会第 73 回大会　2009 年 8 月 26-28 日　立命館大学

野村 信威　高齢者における回想の質と適応との関連について(17)　回想のモダリティ：個人内回想および対人的回想尺度の作成　日本健康心理学科心理学会第 22 回大会　2009 年 9 月 8 日　早稲田大学国際会議場

Nobutake Nomura The Modality of Reminiscence International Reminiscence & Life Review Conference 2009　2009 年 11 月 18 日 Holiday Inn Select Atlanta Capitol Conference Center, Atlanta GA, USA

〔図書〕（計 0 件）

〔産業財産権〕
○出願状況（計 0 件）

○取得状況（計 0 件）

〔その他〕